

## 中国経済の何に注目すればよいのか

松浦克己(広島大学) 張艶(福岡女子大学)

中国は、1978年以降の経済改革を経て今日では世界経済の主要なプレーヤとなり、とりわけ日本を含むアジア経済に大きな影響力を持ち、その生産動向、貿易の推移、金融の変化は各国より大きな関心が抱かれるようになった。中国経済の分析で注意を必要とする点は、限られたデータで比較的短い期間について判断せざるを得ないということである。そのためにデータ生成過程(DGP)の問題については慎重な対応が求められる。本報告は、慎重なDGPの検証を踏まえてできるだけ簡潔なモデルで、中国経済の動向を予測できることを目的とする。

我々は、国際経済関係に直結する輸出入、為替、工業総生産などに注目する。それと関連して通貨量、金利、物価を取り上げる。具体的には、

分析期間を通じてデータの作成方法が一定していること。

説明されるべきモデルに含まれているDGPは統一されていることが望ましい。

DGPで単位根の存在が棄却されないとき、構造変化を考慮した検定では、結果はどうか。仮に構造変化が認められるのであれば、その分野で構造変化があったことを示すものといえる。

その上で、中国の輸出入、工業総生産等を予測する最も簡単なモデルは何か。中国経済の何に注目すれば、その動向をより簡潔に予測できるのか。

を考察する。

本報告の分析結果は次のとおりである。

工業総生産、固定資産投資、社会商品小売総額、輸出、輸入の5変数は $I(0)$ 変数である。

1993年末の構造変化を考慮すれば、為替レートは $I(0)$ 変数である。

貸出金利、預金金利、小売物価指数上昇率、M1、M2は $I(1)$ 変数である。

DGPの共通する5変数VARモデルのインパルス反応から、固定資産投資の影響が最も強く、次ぎに貿易であるが分かった。家計消費の代理変数と考えられる社会商品小売総額のインパクトは弱かった。為替レートを含むモデルを考察する場合は、1993年末の構造変化を明示的に考慮する必要がある。

以上の分析結果から分かるように、固定資産投資が中国経済を主導している。過熱などが危惧されている固定資産投資が中国経済の高度成長を牽引している以上、その急激な縮小は不測の混乱をもたらす恐れがある。問題があるとすれば、緩やかな調整が望まれる。